

触覚の世界

高村光太郎

青空文庫

私は彫刻家である。

多分そのせいであろうが、私にとって此世界は触覚である。触覚はいちばん幼稚な感覚だと言われているが、しかも其れだからいちばん根源的なものであると言える。彫刻はいちばん根源的な芸術である。

私の薬指の腹は、磨いた鏡面の凹凸を触知する。此は此頃偶然に氣のついたことであるが、ガラスにも横縦がある。眼をつぶって普通の玻璃面はりを撫でてみると、それは丁度木目の通った桐のサツマ下駄のようなものである。磨いた鏡面はさすがにサツマ下駄でもないが、わずか五寸に足りない長さの間にも二つ程の波があ

る事を指の腹は知るのである。傾斜の感覚を薬指は持っているであろう。鏡面の波動を感じずる味わいは、丁度船のおだやかなピツチングのようである。少し快よい眩暈めまいを感じさせる程度である。

人は五官というが、私には五官の境界がはつきりしない。空は碧あおいという。けれども私はいふ事が出来る。空はキメが細かいと。秋の雲は白いという。白いには違くないが、同時に、其は公孫樹いちようの木材を斜に削った光沢があり、春の綿雲の、木曾の檜ひのきの板目とはまるで違う。考えてみると、色彩が触覚なのは当りまえである。光波の震動が網膜を刺戟しげきするのは純粹に運動の原理によるのである。絵画に於けるトオンの感じも、気がついてみれば触覚である。口ではいえないが、トオンのある絵画には、或る触覚上の玄

妙がある。トオンを持たない画面には、指にひつかかる真綿の糸のようなものがふけ立っていたり、又はガラスの破片を踏んだかかと踵のような痛さがあるのである。色彩が触覚でなかったら、画面は永久にペちゃんこでいるであろうと想像される。

音楽が触覚の芸術である事は今更いう迄もないであろう。私は音楽をきく時、全身できくのである。音楽は全存在を打つ。だから音楽には音の方向が必要である。蓄音機やラジオの音楽が大した役を為さないのは、其れが音の方向を持たないからである。どんなに精巧な機械から出て来ても此複製音は平つたい。四方から来ない。音楽堂の実物の音楽は、そこへゆくと、たとい拙くとも生きている。音が縦横に飛んで全身を包んで叩く。音楽が私を夢

中にさせる功德を、ただ唯心的にのみ私は取らない。其は斯^かかる運動の恐ろしい力が本になっているのである。私は昔、伊^イ太^タ利^リのある寺院で復活祭前後に聴いたあの大オルガンの音を忘れない。私はその音を足の裏から聞いたと思つた。その音は全身を下の方から貫いて来て、腹部の何処かで共鳴音を造りながら私の心に届いたようにおぼえている。

音楽の力が生理的要素から来るのは分かり切つた事である。ワグネルの或音楽をきくと若い独^ド逸^{イッ}人は知らぬ間にポー^ポー^ーシ^ショ^ョンを起すという。私にはその経験こそなけれ、其れに近い恍^{こう}惚^{こつ}を感じる事は事実である。音楽に酔うというのは卑近に言えば酒に酔うというよりも、むしろマツサアジに酔うという方が近い。どう

かすると性に酔うようなものである。其処を通りぬけて心霊に響くからこそ、あの直接性があるのであろう。私は一時、一晩でも音楽をきかないと焦しょうそう躁そうに堪えられない時期があつた。今考え合せてみると、其れは私が制慾剤ルブリンで僅かに一日を支えていた頃の事である。素よりそういう時の音楽への渴望は、純正な音楽への帰依から見れば、むしろ冒ぼうとく流りゅうなのであつた。しかし其の効果を別にして、交響楽の演奏者の数を予め作曲家が幾人以上と希望するいわれはないのである。

私は曾かつて帝劇で、シユウマン ハイソクのお婆さんの歌をきいた。その歌の巧拙しぱらは姑おく措おいても、その声のキメの細かさ、緻密ちみつさ、匂やかさ、そうして、丁度刀を鍛える時に、地金を折り返し

ては打ち、折り返しては練ったあとのような何とも言えぬ頼もしいねばり強さと、奥深さとに驚嘆した。その声をきいてから、他の歌うたいの声をきくと、あまり筒抜け過ぎて、その歌が煙突から出るもののようにしか響かなかつた。いつでも私の触覚は音楽をきく時の第一関門となるのである。

香とは微分子なのだそうである。肥くさいのは肥の微分子が飛びこむのだそうである。道理で私は香をも肌でかぐ。万物に匂の無いものはない。してみれば万物は常にその微分子を放散させているのである。自ら形骸を滅尽しつつあるのである。滅尽の度の早いのが香料だというだけである。微分子があまり一度に多量に飛びこむと圧迫される。香料は皆言わば稀薄きはくである。香水の原料

は悪臭である。所謂いわゆるオリジナルは屍人くさく、麝香じゃこうは嘔吐おうとを催させ、伽羅きゃらの烟けむりはけむったい油煙に過ぎず、百合花の花粉は頭痛を起させる。嗅覚きゅうかくとは生理上にも鼻の粘膜の触覚であるに違いない。だから聯想的れんそうてき形容詞でなく、厚ぼったい匂や、ざらざらな匂や、すべすべな匂や、ねとねとな匂や、おしやべりな匂や、屹立きつりつした匂や、やけどする匂があるのである。

味覚はもちろん触覚である。甘いも、辛いも、酸いも、あまり大まかな名称で、実は味わいを計る真の観念とはなり難い。キントンの甘いのはキントンだけの持つ一種の味的触覚に過ぎない。入れた砂糖の延長ではない。

乾いた砂糖は湿った砂糖ではない。印度人インドがカレイドライスを

指で味わい、そば好きがそばを咽喉のどで味わい、鮎すしを箸はしで喰べない人のあるのは常識である。調理の妙とはトオンである。色彩に於けるトオンと別種のものではない。

五官は互に共通しているというよりも、殆ど全く觸覚に統一せられてゐる。所謂第六官といわれる位置の觸覚も、素より同根である。水平、垂直の感覺を、彫刻家はねそべていても知る。大工はさげふりと差金で柱や桁けたを測る。彫刻家は眼の觸覚が掴つかむ。所謂太刀風たちかぜを知らなければ彫刻は形を成さない。

彫刻家は物を掴みたがる。つかんだ感じで万象を見たがる。彼の眼には万象が所謂「絵のよう」には映つて来ない。彼は月を撫でてみる。焚火たきびにあたるように太陽にあたる。樹木は確かに一本

ずつ立っている。地面は確かにがっしり其処にある。風景は何処をみても微妙に組み立てられている。人体のように骨組がある。筋肉がある。肌がある。そうして、均衡があり、機構がある。重さがあり、軽さがある。突きとめたものがある。

此処に一つの詩がある。こんな風に一人の彫刻家は人生をまでも観る。

或男はイエスの懷に手を入れて二つの創痕を撫でてみた

一人のかたくなな彫刻家は

万象をおのれ自身の指で触つてみる

水を裂いて中をのぞき

天を割つて入りこまうとする

ほんとに君をつかまへてからはじめて君を君だと思ふ

彫刻家が君をつかまえるという時、其れは君の裸をつかまえるという事を意味する。人間同志は案外相互の裸を知らないものである。実に荷に余るほどのものを沢山着込んで生きている。彫刻家はその附属物をみんな取ってしまった君自身だけを見たがるのである。一人の碩せきがく学がある。その深博な学問は其人自身ではない。その人自身の裸はもっと内奥の処にあたたかく生きている。カントの哲学はカント自身ではない。カント自身はその哲学を貫く中軸の奥に一個の存在として生きている。厨川白村の該博な知

識は彼自身ではない。彼自身は別個の存在として著書堆積裏たいせきりに蟠居ばんきよしている。その人の裸がその学問と切り離せない程偉大な事もある。又その学問の下に聖読庸行、見るも醜怪な姿をしている事もある。世上で人を見る時、多くの場合、その閱歴を、その勲章を、その業績を、その才能を、その思想を、その主張を、その道徳を、その気質、又はその性格を見る。

彫刻家はそういうものを一先ず取り去る。奪い得るものは最後のものまでも奪い取る。そのあとに残るものをつかもうとする。其処まで突きとめないうちは、君を君だと思わないのである。

人間の最後に残るもの、どうしても取り去る事の出来ないもの、外側からは手のつけられないもの、本人自身でも左右し得ぬもの、

中から育つより外仕方の無いもの、従つて縦横無礙むげなもの、何にも無くして実存するもの、この名状し難い人間の裸を彫刻家は観破したがるのである。だが裸は埋没され、町ていねいに匿かくされているのが常である。善いにせよ、悪いにせよ、それが事実である。いくら理想家でも、人間に即刻裸で歩けとは言えないであろう。実に人世とは裸を埋没させる道場かと思えるばかりだ。しかし、着物が多くても少くとも実際は構わない程、結局するところ、人はのがれられないものである。価値を絶したところに、其の人の真の姿があらわれて来る。彫刻家は此の無価値に触れたがる。なるほど人生には敵味方がある。又其の故に社会は進展する。けれども彫刻家の触覚はもつとその奥の処にごツつりしたものを探らうと

する。だから彼の見方は大抵の場合此の現世に逆行する。現世を縦に割る見方である。其処までゆかないと落ちつかない。人生の裸をつかまえないければ、人生を人生と思えない。人生の裸とは唯世間の真相をのみ意味するのではない。所謂現実暴露的な状態上の問題ではない。千万の現象そのものに、すぐ裸を見る力が欲しいのである。赤外線による写真には眼に見えないものが写るそうである。彫刻家の触覚は霧を破ろうとする。そして又霧は霧である事を確かに触知しようとする。

人生そのものには必ず裸がある。むしろ、眼を転ずれば人生そのままが既に裸だと言えるのであろう。けれど人間の手に成るものは必ずそうとも限らない。人間の手に成る作品を見て、其中に

実存する裸の力に触れるのは愉快である。作られ方の力ではない。又その傾向の力ではない。作られ方も傾向も皆充分考慮に値する。けれども考慮は結局時代に関する。動かし難いものを根源に探る触覚が、一番はじめに働き出す。その怪しいもの、若くは無いものは掴むとつぶれる。いかに弱々しい、又は粗末らしい形をしたものでも此の根源のあるものはつぶれない。詩でいえば、例えばヴェルレエヌの嗟嘆はつぶれない。ホイットマンの非詩と称せられる詩もつぶれない。そんなものあつても無くてもいい時代が来てもつぶれない。通用しなくても生きている。性格や気質や道徳や思想や才能のあたりに根を置いている作品はあぶない。どうにもこうにもならない根源に立つもの、それだけが手応を持つ。

この手応は精神を一新させる。それから千差万別の道が来る。
私にとって触覚は恐ろしい致命点である。

青空文庫情報

底本：「昭和文学全集第4巻」小学館

1989（平成元）年4月1日初版第1刷発行

1994（平成5）年9月10日初版第2刷発行

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2006年11月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

触覚の世界

高村光太郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>